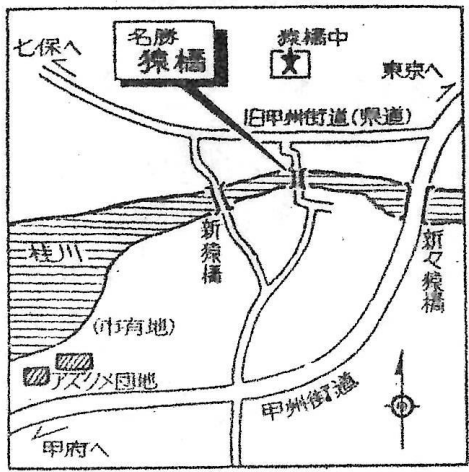


ふるさと再見

第一部 猿橋物語

名勝・猿橋は、地元にとっていつの時代も橋はこの地の代名
かけがえのない財産であり、象 詞だった。

猿橋付近の略図



えんきょうの町

勝であった。「地名が先か、橋 甲州道中猿橋宿として知られ
名が先か」の議論はともかく、た北都留郡大原村は、昭和十年

財産の象徴 を音読みに

<18>

「去る」では縁起悪い



猿橋のおかげで発展した町の中心街

の町制施行で猿橋町となった。
郡役所を擁し、郡内随一の観
光、商業地として栄えた。だか
ら二十九年八月、近隣七か町村
が合併して、現在の大月市が誕
生した際にも、地元には強い抵
抗があった。

「観音の人々にシヨックだっ
たのは、市役所が広里村(現在
の大月市中心地)に移ることで
した。こゝちに合併して、猿橋
市を、なんて声まであったほ
どです。……」先にも言及した
た当時の町総務課長田中福次郎

さん(丸)が述懐する。
古い土地の人々は、橋は「さ
るはし」と呼びながら、地名の
方は「えんきょう」と音読みす
る。「さるはし」は「去る」に
通じて縁起が悪いとかで、そう
なるといふ。いつのころから

かにはつきりしないが、人々が
「私は、えんきょう」の生まれ
で……」などという時は、つね
に誇りげである。
もともと天下の奇橋を持つア
ライド、自信が裏目に出て、結
局は町の衰退を招いた面がない
わけではない。

それは昭和初めの話だ。国鉄
架け替え工事がまどろっこしい
くらいです」と猿橋観光協会長
の佐藤友徳さん(丸)。

「それだけに二年後に完成する
昭和の橋」に寄せる地元の期
待は大きい。「いまでも休日
には観光客が結構あるんです。で
も、猿橋がなくてガツカリして
いる姿を見ると気の毒で……」

猿橋の衰退に追い打ちをかけ
たのが中央道。四十四年春、東
京―河口湖間が開通すると富士
方面に向かう観光バス、マイカ
ーは素通り。長い間猿橋を支え
てきた甲州街道が、地盤沈下
を始めてしまった。

る地元は「客が逃げる」と猛反
対、結局、同線は当時の広里村
の駅(現在の大月駅)を起点に
同四年営業開始となった。
「それだけじゃない。地元の
猿橋駅開設の時には反対があっ
て、駅を町はずれに追いやって
しまったと聞いている。昔から
街道と橋で生きてきた人々には、
鉄道の価値がわからなかつた
んでしょうなあ」。地元の願
役の一人はこういつて嘆息し
た。